

# 天孫人種六千年史の研究

三 島 敦 雄 謹 著

## 第一篇 總 論

### 第一 世界東西文明の大祖スメル人種の大 家たる我が皇室並日本民族

東方日出の大帝國を經營せる我が崇高無比なるスメラ（天皇）尊を中心とする天孫人種は、世界東西文明の祖人種として、文明創設紀元六千年を有する所謂世界の黄金人種たるスメル系民族である。彼の歐羅巴種族の如きは、其の文明に光被せられたる銀人種である。若し我が天孫人種にして、舊説の如く銅鐵人種たる蒙古、波斯、ヒット等の種族であるならば、余輩は固より日

本原始史の研究を放棄して顧みないであらう。然るに余が本書を著述する理由は、我が天孫人種は斷じて二千五百年前に於て、これ等種族の如く半開状態でなく、既に已に憂秀無比の文明人種たる事跡明白なるもの存し、我が神聖なる皇室、古代神社並所祭氏族といひ、帝國傳統の理想信仰たる「神ながらの道」といひ、實に人類文化の祖たるスメル系人種たるの史實と、其の特長たる思想に淵源すること炳焉なるものがあり、従つてこれに因りて金甌無缺の日本國體の表現せられつゝある次第なるを以てである。

殊に我が皇室はスメル名稱の本源として、スメル人の大家たる君主の御系統たること顯著たるもの存し、且つ「神ながらの道」の理想信仰は、スメル時代より傳統の經國の大精神にして、全く天孫として尊崇せられ給ふ御系統であり、其外多數の同人種系氏族は臣族なること明にして果然日本建國神話と一致し、將又僅に建國以來の君主たるに止らずして、歴史時代に入りても既に六千年を經過し、文字通り萬世無窮の寶祚たるは、本書の著述を速進せしめたる譯である。

抑、天孫人種の本源は、既に遠く有史以前に於て忘失せられ、其の真相に至りては、遽に揣摩臆測を許さざるものがあつた。從來の研究方法は、神話言語等の類似暗合を以て直にこれを速斷せし嫌あるも、余は我が國體の根源たる皇室並古代神社と創祠氏族とを基柢として、其の祭神、

## 研究方針

理想信仰、神話、言語、風俗、骨格容貌、美術工藝等を調査し、これを世界に於ける二千五百年前の古民族に求め、先づ近く我が神話上に最も有力なる建國人種の本源として信ぜられたる朝鮮種族に接觸するに、一方學者の信じたる豫期に反して何等の感應なく、僅に積石塚種族たるツングース系の後出雲派と密着不離の關係あるを認むるに過ぎぬ。更にこれを南方に求むるも、前印度モン・クメール系種族たる倭人派や、マラヨ・ポリネシア系種族たる隼人派、前出雲派等の現はるゝに止り、これを遠く波斯、ヒッチト、希臘等の舊説地方に探ぐるも、これ亦豫期の反應を認めざるのであつた。

然るに驚くべし、今を距る實に六七千年以前より世界に於ける東西文明の搖籃地として、人類文化の祖人種として、最近世界に有名なる古代バビロニアのスメル人と、中世以降バビロニアのセミチック・バビロニアン人とを研究せしに、恰も磁石の鐵片に觸るるが如く吸引合體し、脈絡相貫通して鼓動を感ずるものがある。

高天原バビロニア説は、既にケンブル氏、原田敬吾氏等の説がある。併し未だ學者の肯定する所とならず、従つて社會の認むるに至らざる譯であるが、若し夫れ日本原始民族を構成する各種族たる、

天孫人種はス  
メル人の系統

日本原始民族  
構成人種

天孫人種

スメル族 古代バビロニア人並中世以降海國を建設せるもの、普通海國人をも總稱してセミチツク・バビロニアンといふも血液思想濃厚である。  
 セミチツク・バビロニア族 中世以降スメル・アツカドの總稱にて、其一部はスメル・セミツト族の混血人、

倭人派……前印度モン・クメール族

隼人派

マラヨ・ポリネシア族

前出雲派

後出雲派……朝鮮ツングース族

等の言語、信仰、習慣等を以て、古代に於ける多數神社氏族の類を解剖する時は、恰も古鏡の塵埃を拂拭してこれに臨むが如く、偽らざる各種特異の原始姿を影寫するのである。

人類發生の原所と想像せられたる西方亞細亞のアルメニア高原を水源として波斯灣に濺ぐ、エウフラット、チグリス兩河の平地をスメル(Sumer)と云ひ、又バビロニア(Babylonia)と云ひ、世界東西文明の原所である。舊約全書によれば、人類の始祖アダム、イブはエデンの園に住し、園を繞れる河をエフラットとある。エデンはスメル語の平野の義で、スメルの方は、エウフラット、チグリス河に圍繞せられてゐた。故にスメルを以て人類最初の家族の起原と成すものである。それは現在の基督教に於ても斯く解釋されてゐる。

スメルの地は人類原始的故郷と信ぜらる

舊約全書には、世界創造を以て紀元前五五百年(希臘譯の計算)、又は紀元前四千年(ヘブライ計算)とあるが、併しスメル人は、紀元前五千年紀に於て既に已に象形文字や原始的楔形文字を使用し、紀元前四千年紀に於ては、楔形文字に進み、歴史時代に入りて燦然たる文明を創設した。



バビロニアの文明は、恰も水に石を投げられたる波文の如く洽く人類に恵まれた。美術工藝、理想信仰、法律、天文学、大陰曆、數學、醫學等直接間接世界に光被せられ、東西文明の基礎と成つた。埃及文明は紀元前三千年紀に起り、スメル文明の精神物質共に高尚精緻なるに比し、卑俗粗野であつた。

バビロニア文明は世界東西文化の基礎

楔形文字は粘土板に記され、今日までバビロニア及アッシリアの都趾より發見せるもの無數數十萬個に達し、その神宮文書、圖書館文書は紀元前三千年紀前後のものである。古代より天文字、數學、大陰曆等發達して、一年を十二ヶ月に、一日を廿四時に、一時を六十分、一分を六十秒に區分し、七行星の名に因みて一週を七日と定め、度量衡等も一定した。

世界最古の成文法スメリア家族法(實名ウルカギナの法典)は、紀元前二千七百五十年紀の作といはれ、世界最古の大法典たるハムラビ法典(バビロン法典)は、紀元前二千二百二十

年バビロシ第一王朝の七世ハムラビ大王の編纂に係り、この法典を録せる石碑は、第九圖の如く高さ二米突四分一の緑石で、その上部に日神よりハムラビが法典を授かる像を刻し、その下に法文が載せてある。當時法律關係の證書は、信託、組合、倉庫、保險等をはじめ具備せざるなく、殆現代と遜色がないと謂れてゐる。

バビロニアの愛の母神イスタル (Ishtar) 女神(第十三圖)は、希臘に入りてアテーナ女神となり、羅馬に入りて聖母マリアに變化されたといはれ、耶蘇教神話の殆バビロニアに淵源することは定説である。その聖書の洪水物語に酷似したる洪水神話の發見は、バビロニア古趾の發掘を速進せしめたる最大の原因であつた。バビロニアの旭光から成る神字アン  の略字たる十字咒符は、後世耶蘇教の十字架、印度のスワスチカ 、支那の十字咒文の本源である。

スメル國名の起因に就ては、今日の程度では明瞭を缺ぐも、スメ (Sumer) はセミット語の神の義で、彼等は紀元前四千年紀にバビロニアの北部に移入して、南部の文明民族の王——所謂神民族の王——スメルの國王は神の權化にて——日神の子火神の權化として、此國土に天降るといふ理想信仰によりて、尊崇してスメ即ち神といひ、また洲名とも民族名ともなるに至つたと思はれる。

天皇の尊號  
皇國

日像鏡  
月像頸飾  
武神の表像劍  
三種神器  
菊花紋章

神宮を都市の  
中心とす

バビロニアの  
神名



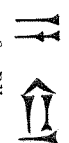












る。

我が國に於て天皇をスメラ、スメラギと申すスメラは、スメルと同語、且つスメル國と皇國と一致して神國の義であり、天皇を明津神と申すは、スメル語の火神アグ (Ag) ツ神の義で、日神ウツ (Ut) の御子たる火神アグの權化として、この國土に天降り給ふたのである。天皇をスメラギと申すは、スメル (Sumer) 、アグ (Ag) の複稱で、ミコト (尊、命) 、ミカド (天皇、帝) はセミチック・バビロニアンのミグト (Might) 天降る者の義で神といふ言葉である。

バビロニアの日像鏡(第一、二圖)、月像の頸飾、垂下飾、又は玉製の頸飾、垂下飾(第四、五圖)、武神の表像たる劍(第二、三圖)は我が國の三種神器に一致し、バビロニア及アッシリアの菊花紋(第六、七圖)は旭日の美術化で、我が皇室の菊花紋章に共通する。其の他諸種の徴證に因ると我が皇室は、とに角スメルの大君主たることが肯定せらるゝのである。







古代バビロニアのスメルは都市國であつて神宮を中心とした。固より神裁政治で市王即神宮の長官で、神の權化として神政が行はれた。神宮即行政廳であつて、大學校、圖書館、裁判所、稅務署、銀行、天文臺等が附屬し、都市には必ず主神を有し、天神をアン (An) 又アヌ (Anu) 、アンヌ (Annu) 、海(水)神をエア又ヤー (Ea) 、或はアッダ (Ada) 、日神をウツ又ウト (Ut) 、月神をシ

ン(Sia)、火神をアグ(Ak)、軍神、暴風雨神をアッダ(Adad)、とシハ、セミチック・バビロニア  
 ン語で火神をナブ(Nabu)ノ又ギビル(Gibil)ノ南風神をシエトチ(Shueti)ノ海神をチアマット(Tiamat)  
 ともいふ。楔形文字の一例を示せば下の如くである。

アン、アヌ	天 神
 (An)  (An)  (An)	楔形本字 Ann a-nu Ann
エア、ヤー	海(水)神
 (Ea)  (Ea)  (Ea)	e-a Ea
アッダ	水(海)神
 (Adad)  (Adad)  (Adad)	a-da Ada
ウツ、ウト	日 神
 (Utu)  (Utu)  (Utu)	utu Utu
シン	月 神
 (Sin)  (Sin)  (Sin)	sin Sin

アン(An)は本  
 來の天神の義  
 來の天神の義  
 神の決定詞  
 イル(En)は  
 ミチック・バ  
 のビロニア  
 の神の義

これ等の神は我が國に於ても祀られた。日神ウツ又ウトは、我が國に於てもウツ、ウトといひ、  
 又變化してウヅ、ウチ、ウヂ、ヲチ、ウサ、ウス、ウツシ、ウツツなど唱へた。

アク、アグ	火 神
 (Ak)  (Ak)	ak Ak
ナブ	火 神
 (Nabu)  (Nabu)	na-bu Nabu
ギビル	火 神
 (Gibil)  (Gibil)	gin Gibil

ウツ(宇津、宇都)は豊後、伊豫(今安藝)、下野、長門、薩摩等に神社名、地名として傳り、  
 ウト(宇門、有度、菟砥、宇刀)は大隅、駿河、和泉等の神社名、地名に、ウヅ(宇豆、珍)は大  
 隅、日向、豊後、大和、紀伊等の神社名、地名、人名に、ウチ(内、宇智)は天孫第一の王都  
 たる薩摩國加世田、第二王都高千穂宮趾たる大隅國鹿兒島神宮の地、伊勢大神宮の稱號等、  
 皇室並天孫族の日神名稱で、神名地名として、この外尾張大和等にも存す。このウチを後世

日本に於ける  
 バビロニアの  
 神と氏族

宇津宮 亦珍宮  
 宇津神社 伊豫國小  
 宇都宮 社下荒山  
 宇津宮 社下荒山  
 宇津宮 社下荒山  
 宇津佐神 社下荒山  
 宇津佐神 社下荒山



ノ(安濃)アマヌ(天野)といひ伊勢紀伊の神名地名に、月神シン(Sun)はシメ(小竹)、シナ(志奈、科、信)といひ、紀伊、信濃等の神名地名に、火神アグ(Ag)は我が國に於てもアグといひ、變じてアクバ、アゴ、アコギ、アキ、アギ、アキツ、アキバ、アカ、アタゴ、イクタ、カグ、カラクニ、カゴ、カコ、コとも稱へた。

アク(飽)は火神ギビル族の本據、吉備兒島の地名に、アクバ(飽波)は駿河の神社名に、アゴ(吾、英虞)は志摩の神名地名に、アコギ(阿漕)は伊勢の地名に、アキ、アギ(阿紀、飽、安藝)は大和、安藝の神名地名に、アキツ(明津、秋津)は天皇の尊號、本洲の國號、大和の地名に、アキバ(秋葉)は遠江の神社名に、アカ(明、明光、赤)は播磨、河内、紀伊、上野の神社名地名に、アタゴ(阿多古、愛宕)は丹後、山城の神社名地名に、更に變化してイクタ(生田)は英虞神を祭る攝津の神社名に、カグ(香、香具)は大和紀伊の地名に、カラクニ(韓國)は大隅の山名に、カゴ(鹿兒、香語)は第二の王都たる大隅、尾張氏等の神名地名に、カコ(加古、可古)は播磨、丹波の神名地名に、コ(籠、高、兒、古)は丹後、備前、大和、伊豆等に神名地名として存じ、各火神に緣故を有す。また火神は日神ウツの子といふ思想に因りて若狹彦神即ちワカウツ、新田神即ちニイウツとも稱へた。

天野祝伊  
小竹祝伊  
佐良志奈神  
飽波神社  
阿紀神社  
秋葉神社  
飽速玉神社  
明石神社  
赤坂神社  
阿多古神社  
天香山澤賣  
神大  
韓國嶽大  
鹿兒山  
天香吾山命  
鹿氏  
鹿兒島神宮  
伊可古夜日  
女  
天兒屋根命  
伊古奈那神  
籠神

アグの配偶神タシメイツ(Tasimetum)はタンシ、タンセ(荅志、塔世)に訛りて男神と共に志摩伊勢の地名に、ギビル(Gibil)は吉備、大隅の霧島山に、ナブ(Nabu)は變化してニフ(丹敷、丹生)となり、紀伊、大和、若狹等の神名、地名、人名として傳つた。

其の他スメル語のナグ(Nag)供御、神饌、犠牲の義は奈具神、名木神、奈爲神として皇室及丹後地方に御食津神として祀られ、深淵をズアブ(Zuabu)といふは信濃下諏訪、周防屋代島に各海神が祀られ、海をアアツバ(Aatuba)といふは、橋に變化して日向の大隅國海三神の原所として傳り、海岸をアハ(Alia)といふは、アハ、アハギ、アハラギ、アハハ、アナバ等に轉訛し、アハ(淡、安房、阿波)は淡路、安房、伊豆、遠江、伊賀、大和、志摩等の神名地名に、アハギは橋小戸の阿波岐原に、アハラギ(阿波羅岐)は志摩の地名に、アハハ(阿波々、鴨波)は遠江、播磨の神社名地名に、アナバ(阿奈波)は伊豫に神社名として残り、各海神に緣故がある。

また魚をハ(Ha)といふは、我が國に於てハタといひ、<sup>ハタノヒロコトノヌカサキノメノ</sup>鰭廣、鰭狭、八太造、博多津の名に残り、セミチック・バビロニアン語で魚をヌヌ(Nunu)といふは、我が國に於てヌ(沼、奴、怒、淳)といひ筑前、安藝、備後、伊豫、攝津、伊勢、伊豆等の神社名地名に、變じて

丹生都比咩神  
社伊  
丹敷戸畔  
若狹遠敷神  
奈具神  
奈具神  
名木神社  
比治麻奈爲神  
下諏訪神社  
大玉根神社  
安房神社  
阿波神社  
阿波神社  
率川阿波神  
淡路伊弉諾神  
阿波々神社  
阿奈波神社

ナ(灘、難、名、魚)は筑前、四國、攝津其の他魚の古語に、ノ(野々)は伊豫の地名及小兒語の神の義に用ひられ、ノ(野)は安藝、伊豫その他に、これ等の語は海神鎮座の縁語として存す。

かく古代に於ける地名人名等は殆祭神名に起因する。日本の大號をオホヤマト(大日本)といふは、海神ヤリの神たる大和國大和邑大和神社に、本洲を秋津洲といふは、火神アグの神たる大和國南葛城郡秋津村の秋津神に、四國を伊豫洲また伊豫二名洲といふは、海神ヤリの太魚フトナの義で、ヤリの神の本國伊豫大三島大山積和多志大神國幣大社大山祇神社に、九州を筑紫洲といふは、隼人、前出雲派の祀る月神たる筑前國筑紫郡筑紫村筑紫神社に起るの類である。

天孫降臨して薩摩吾田の長屋の笠狹に第一の王都を定めらるるに方りて、先着者たる吾田國主長狹(日神)族は、長屋(海)神と長狹(日)神とを並祭し、伊勢國宇治(日神)土公族は、衢(海)神を山田に、宇治(日)神を宇治に並祭し、伊豫國越智(日神)族は、大長宇津(日)神と大山積和多志(海)大神とを、紀伊國名草また宇治(日神)族は、名草(日)神と竈山(海)神とを、豊前國宇佐(日神)族は、八幡(海)神と宇佐(日)神とを、筑前國安曇連名草(日神)族は、綿津見(海)神と宇都志日金折(日)神とを、大和國珍彥(日神)の裔長尾市(日神)族は、海神たる大和神と日神等を並祭した。之れ等

日本の國號オホヤマトは海神ヤリは火神アグ伊豫二名洲は海神ヤリの太魚筑紫州は月神

海神を祖神日神火神を祖先といふは原始思想

我が國に於けるバビロニアの神職名

の氏族は日神を以て稱名とした。バビロニアに於て日神ウツは海神ヤリの子である。我が國に於ても海神を祖神として主祭するものは、其の子日神名を以て稱名とした。古事記に、安曇連は綿津見神の子宇都志日金折命の裔といひ、神功紀に磯賀海人名草とあるは、原始思想を傳へたる其の一例である。また日神を主祭するものは、其の子火神名を以て稱名とする例で、天孫人種系の諸氏にして、この三神を並祀せざるものは殆稀である。

この三神並祀は原始時代に屬する氏族であつて、古代に屬する氏族は、日神火神の二神又は火神と海神の分化神たる海神の並祀、或は日神を祭祀する例である。

セミチック・バビロニア語で禁厭を司る神職を、マシ〜(Masimasi)、又はマシマシト(Masimashin)とよぶ。我が國に於て物部連の祖、饒速日命は禁厭を掌るといひ、其の子宇摩志麻治命は、即ちマシ〜の神名であつて、現に物部神社に祀られてある。

物部の物は朝鮮ツングース語の靈モウの義、部はマラヨ・ポリネシア語のベト(Bet)雜人の義で、本來前出雲派語の神部ウヅと同語、古國語の神祇の職名であつて、斷じて舊説の如く其の語原は武夫の義ではなからず。

猿女君はシャール(Salin)であつて、神託を求むる神職の名である。天岩戸の神懸神話は符



合する。猿女の名の猿田彦神と類語たるに因りて、後世迷誤してこれに關する新神話が構成されるに至つた。

本來猿田彦のサルはセミチック・バビロニアンのシャール(Saru)またサルで王の義、海神たる衢神を伊勢山田に神の王として祭りたる名稱である。然るにこれをチアム系古國語のサル(Sarhal)と云ふ先驅の義に誤解した。

天孫族たる尾張連及吾田の小橋君は、ウバリ(Ubari)の變、神奴の長の義で、神奴たる隼人等を率ゐて天孫及神明に奉仕する名である。猶原田敬吾氏によれば、中臣はナグツアミル(Nak am mi)で神供を掌る神職、忌部はエンメル(Embel)で祓詞を讀む神職、大久米命のクメ(Kume)はスメル語の武具の義で武人の稱である。

殊に皇室に於ては本來海神たるヤリの神、日神たるウツの神、火神たるアグの神、御食津神たるナグの神、草薙劍たる軍神アツダド等を並祭せられた。崇神天皇の朝に諸神を宮中より分離して、日神、火神、御食津神、軍神等を大和笠縫邑に、海神を大市の長岡岬に、尋で大和邑に遷され、垂仁天皇の朝に日神をば倭姫命によりて、本來伊勢宇治土公が日神を祀る宇治に鎮座せしめられた。この日神の鎮座地に更に皇室の日神を鎮祭せられたる偶然の事實を、古典には幽契神話として構

皇室の所祭神

成せらるるに至つた。

當時伊勢山田には本來宇治土公によりて海神たる衢神を祀られ、この神は垂仁帝の朝に至り、威を振ふ宇治土公と共に没落した。併し最初は海神を祀られたるも、海神の信仰衰へて、雄略天皇の朝、曩に皇室に祀られたる御食津神奈具の神鏡を大和三諸宮より山田へ移祭せられ、稍後世に至りてチアム語即ちマラヨ・ポリネシア系の國語の御食津神たる豐受姫神の名を以て申さるるに至つた。古來大神宮の祭典に先づ外宮を祭祀せられ、また天皇后兩陛下の先づ外宮に御參拜ある理由は、本來外宮——海神名たる度會宮は、日神の御親神たる海神の祀られたるに原因する。我が國の神話に日神は伊弉諾神の子とす、淡路伊弉諾神は本來海神なるが故に一致する。

バビロニア人の宇宙觀として天海地の三界あり、天神アヌは最古の神であるが、海の世界より地の世界と太陽界とを生じた。即ち海神ヤリは地神エンキ(Enki)の神徳を兼ね、後、分化して地神エンリル(Enlil)の父——大地の母神となり、又日神ウツの父神であつた。我が國の神話に淡路伊弉諾神が先づ地神を生み、最後に日神を生れたといふ思想と符節を合するが如くである。

かくて奈具神を豐受姫神に變稱せられたる時代に於て、ウツ(ウチ)の神を倭人語、韓語、チア

外宮を先づ祭  
祀せられ陛下  
の先づ御參拜  
ある原因

スメル人の宇  
宙觀

天孫人種語の  
變化



スメル人のバ  
ビロニア定住

無い。皇孫瓊々杵尊はスメルの日神宮名を負ふ御名であるが、彼の大日靈貴、一名辛國息長大姫大目命の子といふ天忍穗耳尊は、朝鮮ツングース系の神話神であつて決して天孫に關係を有たぬ。スメル人の人種學的系統は不明であるが、言語は漆著語で、ウラル、アルタイ語系統なれども文法上の構成を異にする。原住地は明かでないが、今を距る一萬年乃至八千年前に於てバビロニアの地に移住して、漸時部落生活から市王國を建設するに至つたと信ぜらる。

スメル國の沿革

スメルは市王國の集團であるが、文明創設以前より宗主權を有する帝王がゐたと想像せられる。スメル文明の劃期的年代に就ては、都趾出土品、瓦板に彫刻せられた楔形文字の記事、スメル時代及びバビロン第一王朝以後に於ける都市修築の碑文等に因る推定であつて、殊に未發掘の都趾甚尠からざるが故に、固より正確を缺く譯であるが、其の學說に因れば、紀元前四千年紀に文明が起り、三千四百年以前をフアラ發掘品時代といひ、三千年紀ラガシ時代前にキツシユ王メシリムが、スメル地方の宗主權を振ひ、三千年紀にラガシ王ウルニナが宗主權を執りスメル王であつた。其の系統はウルニナ王の子アクルガル王、其の子エアンナツム王、其の子エンテメナ王、この後四代の王があつたといはれてゐる。

第十一圖の一、ラガシ王ウルニナの繪馬は王の頭へ籠を載せて、守護神たる日神ニンギル  
ス神宮造營に親ら勞働する模様で、竣工には報告祭が行はれ、祝杯が擧げられた。王の次は  
妃で其の他は王子である。

第十圖の一、銀の瓶はエンテメナ王がニンギルス神宮に捧げたもので、世界工藝美術史上  
最古無比の優品といはれ、其の銀瓶の獅子の顔を有し、獅子を攫む鷲はラガシ市の標章であ  
る。

二千七百五十年紀にはキツシユ王ウルカギナが起り、最古の成文法ウルカギナ法典は王の編纂  
に係り、尋でウムマ王ルガルザギシが王位に即きエレクに奠し、その勢力は地中海沿岸に及ん  
だ。これより前、紀元前四千年紀比アラビアの遊牧蠻族の大部隊北部バビロニアに移入して、スメ  
ル人の文明に化せられ、當時に至りアッカド市地方はセミット種族の占むる所となり、二千七百五十  
年始祖の王をシャルギといひ數代を経て、血統絶え、二千六百五十年紀にシャルガニシヤラリ(サ  
ルゴン大王)がアッカド王朝を建て、其の子ナラムシンは全世界の王と稱せられ、版圖は地中海  
方面に及んだ。サルゴンはスメル人のニップル市のエンリル(Enlil)をベル(Bel)主神、最優者)  
として崇拜した。ナラムシの死後約二百年間はバビロニアの暗黒時代で、二千四百五十年に至り  
再びラガシ王が覇權を掌握する所となり、其の英主をグデア王(第十一圖の二)といふ。

王は靈夢に因りてエラムのアンシャン地方を征し、之れが戦捷報賽の爲に女神ニナの神殿を建立した。石材はシリアより、金銀その他の貴金屬はアラビア(?)より、木材はアマス、レバノン山に採り、アスファルトは北海より運んだ。

嗣子ウルニンギルスの時、二千四百年ウル王朝起りて宗主權を執り、二代の王ヅンギは全世界の王と稱し、また「スマル及アッカトの王」とも唱へ、二千三百五十年イシン王朝起り、第七代ウルニニブに至り、シリアのアラマイ人と呼ばれるセミツト族の侵入に因りてスマル人の王は滅亡するに至つた。時に紀元前二千二百五十年であつた。

スマル人の都市王國は、封建制度で小國が團結して王國に反對したる事績は、ラガシやニツプルの古碑等に因りても知られるのであるが、併し宗主權移動説の如きは殆推想説なることを一言斷つて置く。

スマル人が世界文明の祖人種たる名譽を負ふに至れるは、固より人種的優秀に在るも、亦その土地の環境にも原因する。蓋しエウフラット、チグリス二河の汎濫旱魃の二期は理智を開發し、土地の肥沃は物資を充實せしめ、相俟つて文明の創造を可能ならしめた。後世ながら希臘の史家ヘロドトス紀元前五世紀の頃、自らバビロニアに旅行して、

スマル文明は土地の環境にも原因する

バビロニアの全土は埃及のやうな運河が縦横に通じてゐる……其の運河はエウフラット河から他の一河チグリス河に連らなつてゐる……我れ等が見聞したあらゆる國々の中で、バビロニアの如く豊饒なる地は他に見當らない。實に無花果、橄欖、葡萄等及びこれに類せる樹木を生ぜずといふことなく、穀物は最もよく出來て、普通の二百倍、多いときは三百倍にすら至ることもある。小麥や裸麥の葉の廣さは屢、四指に至る程である。

と以てその一斑が察知せられる。

バビロニアの本國は、スマル時代の中期以降、スマル、アッカドの二州に分たれた。本來スマル、アッカドは、スマル族とセミツト系種族との區分の稱であつた。

ハムラビ大法典の冒頭に「われは牧民の司なり、救世の主なり……わが懷ろにはスマル、アッカドの民を育くむ」。また新バビロニアを征服したる波斯王キロスの自筆碑文(紀元前五百四十年比)に「朕はキロスなり、朕は軍隊の大元帥にして、又バビロニア王、スマル王、アッカド王位を兼ねる者、即ち四國の大王にして……」とあるによりて知られる。

アッカドは北部バビロニアに屬し、アッカド、シツバル、クタ、キシ、オピス、バグダド、バビロン、ボルシツパ等諸市の總名である。スマルは南部バビロニアに屬し東北方の住民をキウリと

バビロニアの本國はスマルの二州より成る

アツカド洲の都市名

スメル洲の都市名

呼び、南方平地の部族をケンヂと稱へ、ラガシ、ウル、エリヅ、ラルサ、ウルク、ニッブル、イシン、ドールイルへ、エレク、ウムマ、アダブ（アダバ神話の出處で、舊約全書の人類の祖アダム説話の原所）等諸市の總稱である。就中高度文明はラガシを第一とする。

スメル國名の原所は明でないが、アッカド國名の本源はアッカド市であり、バビロニア國名の起因はバビロン市で、波斯時代に稱へられた。尤大國名となりたるはそれ以後である。

バビロニア都の主神

ラルサ市	ウツ(Ut)	日神
ラガシ市(テロー)	ニンギルス(Ningirsu)	日神
ウル市	シン(Sin)	月神
エリヅ市	エア(Ea)	海神
ドールイルへ市	アヌ(Anu)	天神
エレク(ウルク)市	アヌ(Anu)	天神
ニッブル市	エンリル(Enlil)	地神
ボルシッバ市	ナブ(Nabu)	火神

キシ市	ザマイ(Zamama)	日神
シッバル市	シヤマシユ(Samas)	日神
アッカド市	ネルガル(Nergal)	日神
バビロン市	マルヅーク(Marduk)	日神

其のニッブル市エンリル神以上はスメル地方に屬し、スメルの神で、中世バビロニア時代に於て荒廢に歸したるもの甚尠くない。ボルシッバ市のナブ神以下はアッカド地方に屬し、セミット系統の神である。日神の如きは各市に於て名稱を異にするも、その本名はスメル語で、ウツ(太陽、日神の義)、セミット語では、シヤマシユ(太陽)といひ、また月神はスメル語でシン(月)、セミット語でエウルマシユ(月)といつた。

エリヅ海港の主神は海神ヤーといひ、其の地の日神ドムヅ Dornudu (深淵の子の義)は、ヤーの子であるから我が國の傳説と合致する。併しウル市に於ける日神は、月神シンの子であるから我が國に於ける海神と日神とを並祭する氏族とは、其の信仰を異にする。

エリヅ海港の主神ヤーの本宮は、光明教であつて、ヤーの神は生命の神、文化の神、慈悲の神、醫藥の神、惡魔祓の神として、光明の方面は總てその神性に屬した。其の子日神ドムヅも生命

光明教と日本の神教及國民性の一致

産靈神は生々  
化育の神で生  
産をセミチツ  
ク・パビロニ  
アンでムチブ  
といひ倭人語  
にてもムスと  
いふ

スメル時代神  
宮の構造

風俗習慣の酷  
似

左右尊卑思想  
の一致

の神として光明の方面を掌つた。日本の神道及國民性が比較的人生的闇黒面を凝視せずして光明を尊び、樂天、快活、淡泊であり、殊に天照大神天岩戸隠れ神話の「天晴れ、あな面白、あな樂し、あなさやけ」の感情の如きは、必ずスメルの光明教に遠因するであらう。とにかく神道が現世教で、生命の神、生成化育の神たることが一致する。

スメルの後期に於ける神宮は必ず三層乃至七層の高塔を建て、神宮の傍に王宮があり、王をパテシ(祭主にて國王)といひ、又ルガル(王、本來偉人の義)といひ、世襲の官職で祭政一致である。神に直接の奉仕者は女子であつて、我が國の齋内親王の習慣に合致する。

神話に因るにイスタル(Ishtar)女神の裝飾は、冠、耳飾、頸飾、胸飾、安産の石を綴れる腰帶、手足の飾、腰裳等がある。我が古俗と異らざるばかりで無く、安産の石を綴れる腰帶は、神功皇后征韓の際、懐胎に方り石を以て腰に挿み給へる思想と符合する。

パビロニアに於ける左右尊卑の思想は、其神座の順序、男神右(向つて左)に女神左、また王は右(向つて左)に妃王子は左であるから右上左下と知られる。我が國に於ても古代創祠に係る、天孫人種系神社の神坐並社殿の順序は、擧つて右上左下である。然るに中古の初期比に於て朝廷の儀式は、左上右下に變改せられ、従つて現在神社祭式も亦これを踏襲したる譯

であるが、實際神座の位置と矛盾するのである。今日も南洋人種には、左右尊卑の思想は絶對に有しない。僅に酋長は、中心又は前面に位置するに過ぎぬ。日本に於ける原始時代のマラヨ・ポリネシア系前出雲派の神社や、ツングース系後出雲派等の神社には、左右尊卑が判然しない。

紀元前二千二百年セミット族たるアラマイ人のパビロニアに侵入して、スメルのイシン王朝を倒し、初代の王をスマアビといひ、六代にしてエラムの一部將ハムラビに統一せられパビロンに奠都した。時に紀元前二千二百二十三年でスマアビより七世に當る。これをパビロン第二王朝といふ。史的年代の明になりたるはハムラビ以後である。

パビロンの名は、サルゴンの時に初めて見え、本來その古名はスメル語でチンチル *Shinli* 「生命の森」と謂はれた。パビロンの名義はヘロドトスの見聞記に「パビルで、パビロンの大神殿は、アラビア人が一般にパビルと呼んだ巨大なる丘陵に類する名からである」といひ、或はパビルで、パビは門の形、イルは神の義とも解せられる。楔形文字で、



Bābili  
BABYLON

パビロン第一  
王朝

その第一字は門の象形字、第二字は神の字で、又



Babli  
BABYLON

と書く、これまた同字であるから、字義の點よりするも後説を可とする。前者は古字で後者は新字である。いづれにしても其地の主神ベル(Bel)の神殿から名付けられたものである。ベル(主神、最優者、神の王)の神殿は、バビロン市のエウフラット河の右岸に在りて、外面四方階段より上方に登る構造である。舊約全書のバベルの塔(第十八圖)は此の神殿を指すものである。

ハムラビ大王はバビロン大法典を編纂し、當時封建制度を郡縣制に改革して統一し、又宗教を革新して、バビロンの主神マルヅークが「神の王」となつた。ハムラビ法典は、スメル時代よりの慣習法に因りて、一夫一婦主義を規定し、第二妻を嚴禁した。我が國に於て天孫降臨に方り、國神(隼人前出雲派、後出雲派等)は多妻主義であるが、天孫は一夫一婦主義なることが一致する。神話に美醜を以て云々とあるは説話の變化に過ぎぬ。古代の世界に於てスメル人を除くの外は、總て一夫多婦主義又は多夫一婦であつた。後世基督教の一夫一婦主義は、勿論バビロニアの

一夫一婦主義  
はスメル人の  
理想

思想に淵源する。

バビロンの主神マルヅークが最高神となるに至りて、エンリル、アヌは權力を譲り、エアは隠れて助言者となり、マルヅークが、ウツ、シン、アッダ等あらゆる諸神の神格を包容して益々一神教的傾向を現しモゼス教、基督教の先驅となつた。

ハムラビ大王の子サムスイルナの時、紀元前二千年スメル族のリムシンを倒し、スメルの王族臣民は難をカルデア及び波斯灣に逃れて海國を建設し、時機の到來を待ちたれば、ラガシ、エリヅ等海岸都市の復活は侵入を虞れてこれを荒廢せしめた。

當時に於ては既に高尚なる古代スメル時代の文明は退歩し、宗教も卑俗となり、藝術品も粗雑となつた。スメル語の如きも神聖語を除くの外は、殆廢れてセミット語の専用となり、(但海國は此限にあらず)。楔形文字の記字法の如きも、其の發明者たるスメル人は、本來東洋流に右記豎行に記したるも、セミチック・バビロニア人は、西洋流に左起横行に記することに變改した。

紀元前二千年紀に至り、北方高原に住む山住民カシット人(セミット族)侵入して、第一王朝を倒しカシット王朝を建設した。アッシリアは暫くバビロニアの屬國であつたが、紀元前千二百二十五

スメル人海國  
建設の動機

スメル文化の  
退化

絶  
スメル語の廢

スメル人の記  
字法は東洋流

カシット王朝  
アッシリア時  
代

スメル人の海  
國バビロニア  
アツシリア封  
鎖

新バビロニア  
王國

年興起してバビロニアを征伏した。これよりアツシリア時代といひ、其の版圖は埃及に及んだ。スメル人は紀元前二千年紀の前半よりエウフラット河口即波斯灣頭に海國（マートタムチ）と呼ばれる特種の國家を起し、バビロニア、アツシリアを封鎖せしが、紀元前約六百九年に至り、カルデアのナボボラッサルが、メデア高原の王キアクサレスと同盟して、アツシリアの討伐に方り、海國の人士は之れを援けて、國都ニネベを攻撃すること二年にして陥れ、紀元前六百六年新バビロニア王國を建設した。ナボボラッサル王は、其の子ネブカドネザル（原名ナブクヅリウズル）をして埃及を討たしめ、尋でネブカドネザル王位を嗣ぎて、猶太の叛くに方り國都を陥れ王及貴族を擒にした。當時バビロンの強盛榮華は古今に冠絶すと稱へられた。

其の子第三世ナボネドス王は、敬神の念極めて厚く神宮の修築甚だ尠くない。然れども王は迷信的文弱にして尙武の氣象に乏しく、紀元前五百三十九年波斯のキロスサイラス王の侵入するに方り、僅に其の子ペルシャザルをして、之を邀撃せしめたるも、マルヅーク神宮の神官等の内通に因りて生擒せられ、ペルシャザル敗死して遂に波斯の版圖に屬し、後、アレクサンドル大王波斯を亡し幾千もなくしてバビロニアは荒廢した。紀元前三千年紀の海港エリツは、現今に於ては海岸を距ること實に百二十五哩の陸上にある。バビロニアの家屋は、古代より煉瓦と之れを接

バビロニアの  
荒廢

合するにアスファルトを用ひた。其の事實は創世記にも記されてゐる。第二十一圖は崩壞して土砂に埋没したるバビロン古趾で、第二十二圖は、發掘中の同市街及びネブカドネザル王宮殿の古趾である。

バビロニア人  
の他郷移住の  
機會  
海國建設と天  
孫人種諸氏の  
海神祭祀の關  
係

バビロニアの政治的興廢は常に窮りなく、スメル王族及びセミット化したるスメル人の他郷移住の機會は、原田氏も説かれたる如く、バビロン第一王朝の興起、新バビロニアの滅亡に方りて、避くべからざる運命であつた。殊に永く海國を建てたると、日本に於ける天孫人種系氏族の擧つてエリツ海港の主神ヤリの神を祖神として祀りたるとは、極めて深き由縁があるであらう。近古日本海賊（水軍）大將軍の本據地たる伊豫三島水軍の祖、小市國造の曩祖が、<sup>ヲナ</sup>原始時代に於て海神を祖神として瀬戸内海中央の咽喉部たる伊豫二名洲（海神名）の大三島（古名野々島——奴々島——海神の島）に、日神たる宇津神を大長島（神の鎮護地の義）に並祭し、古代より水師を以て奮闘せるが如き、或は海人部の宰領たりし安曇連の本據を儼國（古名奴國——海神國）といひ、海神を祖神と祀りて活躍せるが如き思想は、必ず遠く海國時代に淵源するであらう。

バビロニアの海國時代比に於て我が國に先着のバビロニア系氏族には吾田國主長狹族、伊勢國宇治土公族、伊豫小市國造の祖越智族、紀伊國造の祖名草族、豊前宇佐國造の祖宇佐族、筑前儼國

我が國に於け  
るバビロニア  
系氏族



安曇連の祖名草族、大和國造の祖珍彥族、物部連の祖宇摩志麻治族、紀伊國天野族、小竹族等の類がある。尋で天孫に陪從したる氏族には、忌部、中臣、猿女等の神官と久米等の武人がある。其の他安藝國造、伊豆國造、穴門國造、駿河庵原國造、伊豫風早國造等の祖、及び和泉國茅渚族、淡路國淡族、阿波國日鷲族、尾張名古屋族、信濃國更科族、下諏訪族、播磨國加古族、古吉備族、備後國沼名前族、周防國大玉流族、筑前國名籠屋族、對馬海族等の氏族も、多くは此の前後の到着か又は分派である。

天孫人種の東洋移住は勿論海路であつた。それは天孫人種は殆擧つて海神を並祀し、殊に皇室に於ては、シユーチ(南風)の神たる鹽土神(住吉筒之男神)に其の關係最も深く、且つバビロニアの古跡より印度の鐵木、支那のコバルトを發見するに因りて其交通が證せられる。

スマル人は黄色人種に近似し、豊圓なる顔面に彎曲せる高さ鼻と、世界人類中最大の眼とを有し、全く特異なる容貌で、黒色波狀毛、短軀である(第十一、十二圖)。セミット人は白色人種に屬し、瓜實形の顔面に隆鼻大眼、黒色波狀毛長軀である(第十二圖の二)。我が國に於ける猿田彥神の神話及び其裔といふ宇治土公は、高鼻を以て有名であり、大久米命は大眼玉を以て知られた。現に彎曲せる高鼻隆鼻のタイプは日本人に尠くない。セミット人と同種族たる猶太人に、黒髮黒

東洋移住は海  
路

スマル人のタ  
イプ

セミット人の  
タイプ

瞳子と金髮碧眼との二流があつて、我が國の田舎に金髮又は碧眼の者が稀に在る。

我が皇室の淵  
源

我が皇室に於ては本來スマル系統の諸神を祀られ、スマル語の火神ナブ(Nabu)を名稱とし、セミット系統の神を祀りたると根本に於て相違するが故に、我が皇室は斷じてセミット人に屬する新バビロニア王族などでは在らせられずして、彼のスマルの大君主として、スメ即ち神として、明津神即ち火神アグツ神として、天降り給ふ天孫として仰がれ給ふ御系統なることが想定せられる。スマルの都市王室は、バビロン第一王朝ハムラビの時、封建制度を改革して、郡縣制となすに方りては、祭政分離せる如しと雖、當時社會の事情より推測するに、尙王名を稱せられ且つ神宮の祭主たるは想像に難くない。都市王室の永續したることは、北部バビロニアに接するニッブル市の銀行兼問屋業ムラシユ組合の如き、紀元前二千年バビロン第一王朝時代より連綿として營業を繼續し、紀元前五世紀なる波斯時代に至りても尙繁榮したる事實に據るも決して推斷に難くない。併しスマリア諸王は第一王朝の時に、殆滅亡して海國を建設したるが故に、スマラアグの尊を中心とするスマル人は、或は海國人士なるやの疑がある。尤スマルの都市に於て王名を稱へ且つ神宮の祭主たり得るが故に決して妄斷を許さぬ。

我が國に渡來の諸氏中には、市王の後裔存在せるものありと假定するも、固より理想信仰の超越し、一般よりスメ即ち神として崇められ、遂に民族名とも國名ともなるに至れる大宗家たる王室の尊嚴なるに比すべくも無い。

南九洲に於ける皇室の御遺跡は、第一の王都たる薩摩國加世田の内山田、第二の王都高千穂宮の趾たる大隅國西國分村内山田に炳然たるものが存在する。然るに考古學者の説に、隼人族の割據したる地方には、優等種族に特有なる遺蹟なく、遺物なく、風俗言語も異なりて、天孫降臨の如きは、上古蒙昧なる時代に於て邊陲の地に事跡を假託せるもので、決して史實にあらざると説き、これを抹殺し去るのである。

併し此の説の論據とする所は、南九洲に於ける古墳の仁德帝以後の新塚なることを唯一の理由とするものなるが故に、我が天孫人種を以て積石塚種族なりと推測したる論であるが、積石塚種族は曲玉を裝飾とする朝鮮ツングース系後出雲派の風俗であるから、古墳の遺蹟を以て論證せんとするは、全く天孫人種を以てツングース種族としての想定説となるのであるが、併し我が天孫人種は斷じてツングース種族で無く、バビロニア系統である。スメル人の貴族は第二十圖の三、テロー發掘の如き柳葬で、セミチック・バビロニア人も第十九圖の三、第二十圖の一二の如き石

棺、甕棺を用ひ、積石塚の風習は絶対に有しない。南九洲に最古塚墓の存在せざるは此の理に外ならぬ。勿論天孫人種も後出雲派の風俗を踏襲して、積石塚を築造するに至れるは争はれぬ事實であるが、南九洲に於ける塚墓の新しいのは、後出雲派の移住、又は其風俗移入の比較的後世なりし理由を物語る資料としかならないのである。又その風俗言語を異にすといふも、現にバビロニアの神や言語は、第一第二王都たる地方に明確なるものが存在するではないか、固より隼人國はマラヨ・ポリネシア語が主語であり、畿内中國地方は倭人語が主語であるから、此説の如きは迷妄たるに過ぎぬ。

又曰く、天孫は神なり人なるにあらず、降臨は天より地に降るなり、海を渡りて移住するを謂ふにあらず。神たる天孫日向に降り、宮居を設けて三代の間此處に鎮り給ひしは、神話なり史實なるにあらざるなり(バビロン學會々報)と、併し此の説の如きは、史實をも神話と同視せんとするものである。成程神話の多くは事實ではないが、天降神話には兩面觀がある。即ち天孫は信仰上からはアグツ神であらせらるゝと共に又史的實在であらせられる。それはスメリア王は神の權化として、此の國土に天降れるものと信ぜられ、我が國に於ても同一の思想なるが故に、王即神であるから皇孫即神たるに何の不思議もあるまい。然ればバビロニア王が火神名を稱へ、我が國

に於ても皇孫以下歴代火神名を以て稱號とせらるる譯なるが故に、其の理想信仰たる日神の御子火神が高千穂峯に天降神話の如きは、本來スメル國に於ける天降神話であつて、それを史實と一致を求むるが爲に、我が國の高千穂峯に假託したに過ぎぬ、故に天降神話は固より信仰たると共に、又其の半面には生神たる火神が海を渡りて、降臨し給へる史實の伴ふことを見逃してはならぬ。

或は又曰く、ツングース・カラ系が出雲派で、ツングース・ウスリ系が吾田派火闌降家で、長屋の主神は、他國に於けると違ひ日神大日靈貴大神である（史學雜誌）と、併し火闌降系の吾田派は、天孫族たるスメル系統であると共に、吾田の長屋には、前には國主長狹によりて長屋神と長狹神を、後には皇孫によりて内神と山田神が祀られた。日神を日靈ヒルメといふは、モン・クメール語並その系統を受けたる韓語の古國語であつて、吾田の長屋地方には、ウツの神の祀られたる事跡赫著たるも、日靈神は決して祀られたる形跡が存在しない。

第二王都として神武天皇に至れる日向高千穂宮は、皇國スメルの稱號を負ふ古代日向國たる大隅の官幣大社鹿兒島神宮の所在、内山田の内、鹿兒山の地であつて、今の日向國宮崎は神武東上の際の行在所であつたと想はれる。

## 高千穂宮趾

神武天皇東移  
途次の諸氏

神武天皇の東移に方り、途次先づ診彦族に倚り、次に宇佐族、崗水門族（名籠屋大濟にて名籠屋族、今、戸畑市の名護屋）安藝族、古吉備族を経て山城水門ヤマキの茅渟族の先導に因り、南紀を廻りて大和に入り給ふた。これ等の諸氏は擧つて天孫人種であつた。

天孫降臨前に於て討定の爲め建御雷神を出雲に派遣の神話は、ツングース系後出雲派、對チアム系前出雲派に關する説話で、決してスメル系統に關與しない。天孫の所謂天降は斷じて武力侵入では無い。天孫は同人種たる吾田國主長狹族の奉戴によりて都を定められ、蠻族を徳化して文化に導き給へるに出發せられてゐる。併し蠻族思想を脱せずして王化に背叛する者は、己を得ず正義の軍を起された。神武天皇の東征、崇神天皇の四道將軍派遣等を始め建國の精神は古今一貫してゐる。

日本人種構成  
の種族と所祭  
神の種族  
各種族渡來の  
推定年代  
アイヌ族三千  
五百年乃至四  
千年  
ケタ族三千二  
百年  
倭人族三千年  
倭人前出雲族

日本人種は複雑であるが、併し先着者たるアイヌ種族は、混血は免れないとしても、本來日本人種構成の種族ではない。これに次でケタ族がある。ケタは新來のチアム族が先住者を卑稱したる語で、種族的固有の宗教を有たぬ。今特種民の一部で其全體ではない。次の渡來者は、前印度モン・クメール族倭人派で、龍蛇神を祀る種族や、何々龍神の子孫といふは此の人種である。次にマラヨ・ポリネシア系のチアム族で、倭人派、前出雲派等の長神、貴神ムチノ、咋神ゾヒノ、鴨神等崇拜族

二千八百九十年  
後出雲族二千  
六百年  
天孫人種二千  
四百年  
日本民族は特  
異の結晶

天孫人種の文  
明創設紀元六  
千年

である。次に朝鮮ツングース族の後出雲派たる大日靈貴崇拜族、次にバビロニア系統の天孫人種である。其の他有史以後に於ける支那朝鮮種族の移入は明である。

固より日本民族は多數人種の混血であるが、既に已に換骨脱體して何れの民族でも無く、特異の結晶たる日本民族である。即ち皇室を中心として、混血醸製せられたる大和民族たるは勿論であるが、併し其の建國の大業を経営統一せる中心人種は、世界東西文明の祖人種たるスメル系民族である。然して今を距る二千數百年以前に於て、其の大宗家たる皇室を奉戴して、人類文明の搖籃地たる西の豊葦原の瑞穂國より、日出の豊葦原の瑞穂國に移住して、世界に冠絶せるスメル人本來の大理想を表現しつゝ、實に上下數千年萬世一系の統を垂れ賜ふ。地球上スメル系人種は我が日本民族を措て他に存在しない。血清學上日本民族は世界に比類なき獨特の血液型配分状態を示し、他に同一の民族を見ざるはこの理由に外なるまい。我等日本民族たるものは、奮然この光榮ある歴史と民族本來の天職とを自覺する所がなければならぬ。

神武天皇建國を以て日本紀元に宛つるのであるが、併し天孫人種の紀元は、文明を創設し歴史時代に入りても既に六千年を経過し、バビロニアの地に定住しては、一萬年乃至八千年前に遡るのである。況や其元始に至りては、固より悠遠なる太古に在る。我が國體が天地の原始と共に自

然に發生したといふ民族の信念を有する所以は、これに因りて徹底合致する譯である。

## 第二 天孫人種傳統思想の本源

天孫人種の傳統思想は「神ながらの道」で、其の理想信仰は全くスメル人の思想に淵源する。古代スメルの市王國は本來一族が一部落となり、市王國に發達せるものなるが故に國家は一家の増大である。然ればスメルの君主は人民を赤子と呼んで愛撫し、人民は神父として敬愛した。蓋し家族主義が國家家族主義に發達したるもので、固より君主大家長主義、君主中心主義で、又都市には主神があつて神宮を中心とし祭政一致であつた。併しセミット族は水草を逐ふ遊牧蠻族で個人主義であつた。この君民父子の思想は、セミット系統たる第一王朝以後に於ては漸次にして地を排ひたれども、スメルの王室に於ては、この理想信仰を萬世一系に傳統せられたる理由がある。故に天孫降臨せられても、蠻族を教化包容して海内一家たる家族主義の國家を經營せられたのである。

スメルの王は神の權化として此の國土に天降り、君主即神と信ぜられた。いはゆる偶像崇拜的生神の義でなく、神の表現たる修養に勉め、神格の自信を得るを以て信仰とし、君主即神として

スメルの國は一家の増大はスメル人は家族主義君主大家長主義

セミット族は個人主義日本家族主義國家の淵源

君主は神格の修養に勉む

祭政一致の義

天壤無窮の神勅は天啓にて又史的大詔

高千穂天降神話は本來スメル國の豐葦原國は世界神國化に在り

天孫人種天降人種の義

天啓を下した。蓋し主神たる日神の神勅に因りて正義の政治を行ふを理想とした。これを祭政一致といふ。祭政一致とは神と君との一體、政治宗教の一致で、彼の專制的神權政治や基督教國の祭政分離ではない。

我が國に於ける天孫の天降は、實に數千年以前に於ける理想信仰で、其の皇祖は民族大生命たる信仰上の神にして、又史的實在であらせられ、神勅は皇位の原始に於ける皇祖の神勅にて天啓であり、又史的大詔である。然るに或説にこの神勅を以て神話傳説にて史實にあらずといひ、或は日本建國以後の作爲といふが如きは、國體の本源を知らざる妄誕説である。

皇孫火瓊々杵尊の降臨は、史的事實としては吾田國長屋の笠狭であるが、高千穂峰に天降神話はスメル國に於ける數千年以前の理想信仰であり、皇孫の安國と知らすべき豐葦原國は、日本は勿論スメル國である。否世界である。世界神國化に天降り賜ふたのである。

日神の御子たる火神として此の國土に天降るといふ理想信仰は、スメルの國王は勿論、我が皇室の傳統的信仰であつて、又一般天孫人種系諸氏も古代に於ては同一の思想たりしことは、海神を祖神といひ、日神火神を祖先といふに因りて察知せられる。此の理想信仰あるが故に天孫人種とも天降人種ともいふ譯である。然るに此の精神文明を無視して、海を渡りて

降臨する義に解するが如きは迷誤である。

天孫も天孫人種系諸氏も各日神を祖先と爲すは、スメル人の理想信仰として君民同祖、君主大家長主義の思想で、即ち皇室は日神の本系であるが、此の原始信仰は、日本書紀、古事記等の新神話構成當時に於て、皇室及びツングース系大日靈貴の子孫といふ後出雲派を日神の裔とし、諸氏は天神地祇の子孫に變改せられた。これは極端なる君尊民卑の支那思想や、所謂國神たる隼人前出雲派等の信仰等諸種の事情に因る次第であらうが、とに角この貴重な原始信仰を變更せられても、國民は尙理想と史實に因る君民同祖、君主大家長主義の民族大精神を忘れざりしは幸であつた。

スメルの國に於ては君主も神の權化、國土も神の權化、人民も神の權化又は神裔であつた。我が國に於ても天皇はアツキ神、國土は神國、國民も天神地祇の裔であるから一致する。この君主も神、國土も神、國民も神裔といふ三位一體は地上高天原化の理想信仰であつて、地上より足の離るゝにあらずして、大地を踏張りて人間世界を神國化するに在る。死後の極樂天國でなくして人間の極樂天國であり、死後の眞如ゴットでなくして人間の天皇即神で、宇宙の大生命の最高表現たる天皇である。蓋し「神ながらの道」の目的は、其の神性が宇宙の大生命即ち民族の大生命

君民同祖の信仰を變改されても史實を忘れせず

君主國民國土の三位一體理想の一致

世界神國化  
世界大家族化

王道國家の共存共榮主義  
上下數千年我が皇室傳統の國家經營の大精神

神道の神性は民族の大生命

神と人の連絡は家族主義なるに因る

で、世界國家個人を除外せざる普遍的家族的の神である如く、神武天皇建國の精神に八紘に居り世界を家と爲すとある如く、即ち國家は勿論世界神國化、世界大家族化に存するのである。空漠たる神國化でなく、其の表現を家族化といふ。この普遍我的世界神國主義、世界大家族主義が王道國家の共存共榮主義で、實に上下數千年我が皇室傳統の國家經營の大精神であり、天職であり、また生命である。社會の改造といひ、新日本主義といひ、この理想を擴充すれば足る。或は神ながらの道を以て舊思想の如く想ふものあらばそは迷妄である。神ながらの道は新舊を超越せる天地の公道である。

スメルの光明教の生成化育の教は、日本神道の根源であつて、神道の神は本來民族大生命の崇拜である。民族大生命は宇宙大生命の表現神なるが故に、海神日神火神等を祖先と申した。かく神と人との連絡は家族主義なるに因り、外國宗教の神人の間無關係なるは個人主義なるが爲である。然れば神道の神は、世界國家社會家庭個人的一切を除外せざる普遍的包容的の神であつて、人情的、人道的、國家的、國際的、政治的で、政治宗教等人道の一切を包容するのであるから「神ながらの道」即ち「神そのまゝの道」といふ次第である。併し現代に於ける社會生活の基本は國家であるから、神道は國家を中心として個人世界の兩極端を包

容する譯である。然れば神道の神は斷じて偏狹なる個人主義的國家の神ではない。人靈を神社に祀るは中古以來の思想であるが、これ亦正義の神で、この生命の祭祀は家族制度の根本である。併し倭人、隼人、前後出雲派等の土俗信仰を以て神道と混淆するを許さざるは勿論である。

或は曰く、偶像崇拜だとか、自然崇拜だとか悪口を謂ふものがあるが、何ぞ知らん、偶像其の物を拜するに非ずして、偶像を通じて民族の大生命を拜するものである。自然物の崇拜にあらずして大生命を拜するものである。スメル人の理想信仰を以て野蠻種族の信仰と同視するは、六七千年來の世界東西文明の祖人種を知るの明が無いものである。耶蘇教の十字架も偶像であつて、其の本源はバビロニヤ、アッシリアである。十字は楔形神字アン(八光線)の略字で神聖文字としてバル又はバル(明の義)と訓み、且つ神聖なる咒符として金屬製としても用ひられた。第三圖紀元前八百八十年アッシリナシルバル王の胸間の十字架を見よ。

また多神教だといふも、バビロニアに於ても我が國に於ても、國家の主神があつて多神を統一した。即ち多神たると共に一神たる譯で、家族主義的秩序がある次第である。決して希臘神話神の如く個人主義的不統一なる多神ではない。

神道は偶像崇拜自然物の崇拜に非ず

神道は多神にして一神

神靈祭祀の原

或因神靈祭祀の原因を以て民心集團の政策と爲すも然らず。スメル時代の神祭は神託に因る神の要求に基くもので、これを政治的に解するが如きは後世の臆測に過ぎぬ。

スメル人特有の一夫一婦主義は、神國主義、家族主義理想の表現なるが故に、皇孫降臨當時に於ては確にこの思想の存在せし事實あるも、一夫多婦主義に化せらるゝに至りたるは遺憾であるが、併しこの思想は幸に後世耶蘇教に傳へられて、今我が國に復歸されつゝあるは、天孫人種根本理想の復活である。

基督教、佛教の如きもバビロニア人の神話思想言語習慣を踏襲せるもの甚少からざれども、併しこれ等の宗教は排他的個人主義の國家に發生し、敵國本位の社會を救済するに在るが故に世界主義を高調の餘り、宗教に國境無しで非國家的、非近親的で、人道上却つて偏狹を免れないのは、いかにも環境の然らしむる處であらう。

家族制度の國家は其の理想信仰として個人を除外せざる家が單位で普遍我的であるが、西歐諸國は個人が單位で家を認めざるが故に排他的個人主義である。個人主義的專制を霸道の國家といふ。佛蘭西の專制政治に反抗して自由平等主義の共和政治を生み、更に高調して極端なる社會主義共產主義等の赤化思想となりては、世界をして今更の如く戰慄せしめつゝある次第であるが、其の

基督教佛教も  
バビロニアの  
神話思想言語  
習慣を踏襲

霸道の國家

左傾思想者と  
多數者專制政  
治の弊

原因は種々ありと雖、無神論的個人主義的社會の缺陷に禍ひせられたるは謂ふまでもあるまい。日本に於ける左傾思想者は、我が大理想大信仰あるを忘れて、徒に西洋のそれと同視し、專制國家と思惟するが故に、反國家思想、反皇室主義者が起るに至れるは誠に痛恨に堪えざる處である。爲政者も國民も猛省して、多數者專制政治の弊を除き、國家神國化、國家大家族化の民族本來の天職を發揮すべきである。

我が天皇の御本質はスメラ尊とも、スメラギ、ミカド、アキツ神とも申し、共にバビロニア語の神又は神名を以て申す敬稱語なるに因りて最も明瞭である。英佛のエンペラーは羅甸語のインペラー「命令する義」であり、獨のカイゼルはケーザルといふローマ人の姓より來て居る、國體本源の相違を察知すべきである。世界無比の皇室と民族本來の大理想大信仰を有する光榮ある日本民族は、赤化思想に化せらるゝ如き薄志弱行者たるを避け、これ等の思想を他山の石として、國家は勿論世界神國化、世界大家族化の完成に努力すべきである。

皇太后陛下御編纂の「神ながらの道」の卷頭の御歌に、  
異國のいかなる教いり來てもとかすがやがて大皇國ぶり

と仰せられたる如く、我が神ながらの道の理想信仰は、いかなる思想も融合して綽々たるものが

天皇の御本質  
と外國君主

神ながらの道  
の包容性

存ずるのである。

顧みるに世界人類の文明は六千年前に發生した。その文化の創造者は我がスメラ尊を中心とせるスメル人であつた。スメル——バビロニアの文明が東西に分れて各特異の發達を遂げ、然して今や東洋精神文明と、西洋物質文明とは、スメル——バビロニア系統たる日本民族に接觸復歸するに至つた。何といふ壯嚴なる史的事實であらう。しかも猶新興國民の意氣を有するは、いはゆる流の大なるは源の深きにより、枝の繁れるは根の固きによる。萬世一系の皇室と、神ながらの道とは其の根源である。とにかく我が國體の基柢と神ながらの道の淵源の徹底に因りて、始めて肇國宏遠、樹徳深厚の勅語の大精神が仰がれ、隨つて國民思想の大磐石の土臺が明白に確立する譯である。

幸に日本民族は世界東西文明の祖人種である。殊に我が皇室は世界文明の大恩者であり、人類の救世主であり、世界の至寶であり、人類の大君主たる天徳の具はり賜ふ御存在である。故に日本民族の天職は、この世界無比の史的大事實を背景とし、その傳統思想たる世界神國化、世界大家族化の大旆を掲げて猛進するの一途にある。世界平和の女神は遂にこの大旆下の外には存在しないであらう。

東西文明の復歸

我國體と神ながらの道の徹底國民思想大磐石の土臺

我が皇室は人類の大君主たる天徳の具はり賜ふ御存在である日本民族の天職世界平和の基柢

## 第二篇 我が皇室の淵源

### 第一章 天皇の尊號と理想信仰

#### 第一節 スメラ(天皇)の原語スメ、スメル

古語に天皇をスメラミコトとも、スメラギ、ミカド、明津神とも申し上ぐることは、國家の大事實で國體の基柢である。然るにこれ等原始時代の言語は、既に遠く古代に於て其の言義を忘失せられ、従つて我が民族史も、國家の理想信仰も、不徹底たらざるを得なかつた。併し其の語原を徹底するに因りて、我が天孫人種の本源は、さながら暗雲を破れる旭日を仰ぐの感じが起るのである。

スメ(皇)、スメラ(天皇)とは、古代バビロニアのスメル(Sumer)と同語で、ル、ラは助辭の變化である。スメルの地名は楔形文字で